**ジャパン・タイムズ紙「抱擁」レビュー**

（4月30日紙面、および、The Japan Times Weekend Scene 5月8日～21日号に再掲載）

**年老いた日本人女性：愛する者と死別した後の人生とは？**

**（マーク・シリング ／ジャパン・タイムズ紙）**

**翻訳：白神 愛紀子 (Twitter：@AkikoShiragami/ Facebook: Aki Mori-Saku)**

（写真）

入浴時：息子のドキュメンタリー作品「抱擁（英題：WALKING WITH MY MOTHER）」で、妹のまり子さんと入浴をする坂口すちえさん(左) 。映画の中では、彼女が生まれ育った島に帰郷する前後が映し出されている。| © SUPERSAURUS

（本文）

2008年春、母親の介護をするため坂口香津美監督は、長年に渡り続けてきたドキュメンタリー制作の仕事を辞した。それが「正しいこと」だと思ったからだ。監督いわく、当時78歳だった母のすちえさんは「“精神的混乱”に苦しんでいた。」2006年に実の娘を癌で亡くしており、すちえさんの夫も入院した後、肺炎でこの世を去ってしまった。

ベテラン・ドキュメンタリー監督は「“仕事か母親か”という状況でしたので、迷わず母を選びました」と語った。映画「抱擁（英題：WALKING WITH MY MOTHER）」は、この後4年間の介護の姿をとらえた作品で、昨年の東京国際映画祭で上映された。

「彼女は私を産み、育ててくれた。だから私がお世話をしなくてはと感じた」と監督は言う。

しかし、いざ埼玉の実家に移り住んでみると、坂口氏は現実の深刻さに圧倒されてしまう。映画の冒頭は、これを垣間見るような衝撃的なシーンから始まる。自分は死ぬと信じ込んでしまい取り乱したすちえさんは、パニック症状を起こしてしまうのだ。

「母のこんな姿を見るのは本当に辛かった。（中略）若いころは気丈な女性だったのに、こんなに脆く崩れてしまうなんて」と監督は言う。実母の止めどなく続く数々の要求に直面した坂口監督。彼自身も徐々に精神的に追い詰められるようになっていく。

「“母との二人きりの人生。それが自分の将来。”そう思うと、何だかブラックホールに吸い込まれていくような感覚に陥りました」

フラストレーションや怒りに屈服する代わりに（「このままでは母を叩いてしまいそうでした」）、坂口監督はカメラを使って実母を撮影し始めた。

「これによって、母との距離を作ることができ、彼女をもっと客観的に見ることができるようになりました。（中略）カメラが私を救ったんです」と語った。当初、監督はこの映画を「制作することなど考えていなかった」

やがて撮影を続けていくにつれ、近所の老人用デイケアセンターへ、すちえさんは（時としては勇気を出し、笑顔を作りながら。或いは夜に突然）訪ねるようになる。行かなければならなかったからだ。そしてこれは現代の都会の核家族化や、コミュニティーとのつながりの薄さからも助長された、どこにでもありうる話だと、ふと気づくようになる。

「母は、日本の老後問題における第一波の中の一人。（子どもが親元を離れ、配偶者も亡くなり独りになる、など）」と坂口香津美監督は語る。「以前はコミュニティーの助け合いが通例だったが、今は存在しない。そしてあと10年も経つと、ベビーブームで産まれた子どもたちが70歳を迎え始める。その頃、問題は更に深刻化しているでしょう」

こうした問題には多かれ少なかれ不運なエンディングがつきまとう。監督の母がそうだったように、孤独な高齢者はうつ病や他の病を患ったりするのだ。

「母の場合は心を落ち着かせるために、精神安定剤を服用していました。しかし処方量よりも、上限をはるかに上回るほど多く飲んだりして、後に状態が余計酷くなることがありました。まるで坂道を転げ落ちるようでした」

では何が監督の母をどん底から救ったのか。

「抱擁」は深刻なテーマを扱っているが、そのタッチは意外なほどポジティブで、感激を体感できる映画だ。

その鍵は彼女が生まれ育ち、現在も多数の親族の住んでいる種子島（鹿児島県より南の沖に浮かぶ島）への帰郷だった。

38年の間、故郷に戻らなかったすちえさんだが、親族に暖かく迎えられた。特に７人の姉妹兄弟の中で一番仲の良かった、妹のまり子さんの受け入れが良かった。

まり子さんのユーモアに富み、生命力に溢れ、人を思いやる心は、カメラに生き生きと映し出されている。姉にケーキを食べさせ、笑わせた後、彼女は姉に語りかける。「種子島の人は良く食べ、人に会い、笑うんだ」と。

時に山あり谷ありではあるが、この一見シンプルかつ効能のある処方箋がすちえさんの回復につながった。

映画の最後に映る家族写真では、若かりし頃のすちえさんが、まるで怖いものなど存在しないかのように、レンズを見据えている。その姿が戻ったかのような瞬間を見て取れる。

「奇跡のようだ。母は本当にラッキーでした」坂口監督自身も４年間の撮影を通じて、母親と共に歩んできたことに幸せを感じている。またこの経験から家族や友人を持つことの大切さを教えられたそうだ。

「私は日本の成人40％にもれることなく、未婚者です。しかしここにきて、結婚をしたくなりました。遅すぎないと良いのですが…」 と監督は笑った。

「東京出身者、または地方出身だが単身あるいは家族と共に東京に移住し、戦後の好景気を体験した多くの日本人が老いるにつれて、立ち往生や孤独化してしまうのでは」と監督は懸念している。「こういった方々には戻る故郷も無ければ、彼らを支えてくれる人もいないのです。これは大きな社会問題です」と続けた。

監督は東京の中に「故郷」を作り出すことも可能なのではないかと考えている。「お互いに支い合うことが必要。この世界で完全に独りになることはできないと気づくべきだ」と言う。

撮影し終わってから２年が経過したが、すちえさんは未だご健在とのこと。

「最初は私が撮影をすると、恥ずかしがっていました。『誰が私のことなんて観たいの？』と」しかし、この「普通さ」に日本人は共感しやすいのではと坂口監督は感じている。

「彼女の体験した戦争や、戦後の日本の景気は、多くの日本人が体験したことです。ノーベル賞授賞者だったら、話は少し違ったかもしれませんが」

「今彼女は映画をどのように思っているのだろうか？」との問いに、「『成すべきこと、まるで運命のようなものだった。もし少しでも誰かに勇気を与えられたら』と感じているようです」坂口監督は答えた。

渋谷のシアター・フォーラムにて英語字幕つきで上映中です。詳細は映画HP　www.houyomovie.com　まで。